

小児看護学実習における学生の不安

— 平成 13 年度～16 年度の比較検討 —

宮崎つた子¹, 杉本 陽子¹, 前田 貴彦²

I. はじめに

看護教育の中で臨地実習は、専門職としての臨床能力を修得するために、他では補うことが出来ない重要な学習の機会であり、その意義が唱えられている^{1) 2)}。

学生にとって臨地実習は、今まで学んだ知識・技術の応用能力が求められ、その他にも対象の患者・患児、付き添いの家族、看護師などスタッフとの人間関係への対応が要求され、ストレスの多い学習であると指摘されている^{3) 4)}。

小児看護学実習は、近年の少子・核家族化が定着し、子どもと接する機会が少なくなっている現状に加え、小児看護学の特性ともいえる、言葉によるコミュニケーションが難しい年代や発達段階の違いをふまえた関わりなど、患児の対応に不安や戸惑い、心配ごとがあると考えられる。

そこで、小児看護学実習での学生の不安の特徴を明らかにすることを目的に、実習時期との関係・不安内容とその解決度などについて平成 13 年度から 16 年度の 4 年間について比較検討を行った。

II. 研究方法

1. 調査対象

M 大学医学部看護学科 3 年次後期で小児看護学実習（必修科目、2 単位、90 時間、1・2 年次基礎看護学実習終了後の領域別実習）を履修した 309 名（13 年度 76 名、14 年度 83 名、15 年度 74 名、16 年度 76 名。）

2. 調査期間

平成 13 年 10 月～平成 17 年 2 月

3. 調査方法

実習初日に小児看護学実習での不安について調査用紙に記入してもらい、また、実習終了時にその内容に

ついての解決度を記入してもらった。

倫理的配慮として、実習指導に活かすことが目的であること、記入は自由意思であること、成績に影響しないこと、個人の秘密を守ることを説明し、結果を学会や学会誌に公表することの同意を得た。

4. 分析

学生が自由に項目立てして記述した不安内容をその意味から再度カテゴリー分類したものを 4 年間で比較検討を行った。

- 1) 実習開始前に学生が不安に感じる内容の特徴
- 2) 実習時期（10 月～翌年 2 月までの第 1 グループ～第 8 グループ、1 グループ 8～10 名）による特徴
- 3) 実習終了後の不安の解決度

III. 結 果

1. 受持ち患児の属性（表 1）

患児の性別は、13～15 年度は男女約半数ずつであるが、16 年度は男子が多かった。患児の年代は、13～16 年度のどの年も幼児期が 40～60% と一番多く、次いで学童期 30% 前後、乳児期 10～20% 前後、中学生は若干名であった。

2. 実習開始前の学生の不安

1) 実習開始前の学生の不安の有無（表 2）

「不安がある」と回答したのは、13 年度は 76 名全員、14 年度は 79 名 95.2%、15 年度は 72 名 97.3%、16 年度は 73 名 96.1% で、ほとんどの学生は何らかの不安を抱いていた。

2) 実習開始前の不安項目（表 3）

記述された不安内容の上位 5 項目は、13 年度①「患児との関係」56 名（73.7%）、②「家族との関係」44 名（57.9%）、③「日々の実習記録」27 名（35.5%）、④「スタッフとの関係」26 名（34.2%）、⑤「看護過

1 三重大学医学部看護学科

2 独立行政法人国立病院機構三重病院

程の展開」24名(31.6%), 14年度①「患児との関係」56名(70.9%), ②「家族との関係」54名(68.4%), ③「日々の実習記録」18名(22.8%), ④「看護過程の展開」「看護の実践」16名(20.3%), 15年度①「家族との関係」52名(70.3%), ②「患児との関係」46名(62.2%), ③「看護の実践」12名(16.2%), ④「スタッフとの関係」9名(12.2%), ⑤「健康管理」7名(9.5%), 16年度①「患児との関係」57名(78.1%), ②「家族との関係」38名(52.1%), ③「看護の実践」19名(26.0%), ④「スタッフとの関係」17名

表1 受持ち患児の属性

人(%)

		13年度 (n=78)	14年度 (n=88)	15年度 (n=76)	16年度 (n=82)
性別	男子	37 (47.4)	48 (54.6)	44 (57.9)	63 (76.8)
	女子	41 (52.6)	40 (45.4)	32 (42.1)	19 (23.2)
年代	乳児期	16 (20.5)	14 (15.9)	12 (15.8)	7 (8.5)
	幼児期	32 (41.1)	45 (51.2)	36 (47.4)	47 (57.3)
	学童期	27 (34.6)	28 (31.8)	24 (31.6)	24 (29.3)
	中学生	3 (3.8)	1 (1.1)	4 (5.3)	4 (4.9)

*nは受持ち患児数を示す

表2 不安の有無

人(%)

	13年度 (n=76)	14年度 (n=83)	15年度 (n=74)	16年度 (n=76)
不安有り	76 (100.0)	79 (95.2)	72 (97.3)	73 (96.1)
不安無し	0 (0.0)	4 (4.8)	2 (2.7)	3 (3.9)

表3 実習年度の不安項目合計

人(%)

	平成13年度 (n=76)	平成14年度 (n=79)	平成15年度 (n=72)	平成16年度 (n=73)
患児との関係	① 56 (73.7)	① 56 (70.9)	② 46 (62.2)	① 57 (78.1)
家族との関係	② 44 (57.9)	② 54 (68.4)	① 52 (70.3)	② 38 (52.1)
スタッフとの関係	④ 26 (34.2)	8 (10.1)	④ 9 (12.2)	④ 17 (23.3)
教員との関係	1 (1.3)	1 (1.3)	—	4 (5.5)
看護過程の展開	⑤ 24 (31.6)	④ 16 (20.3)	6 (8.2)	⑤ 16 (21.9)
日々の実習記録	③ 27 (35.5)	③ 18 (22.8)	1 (1.4)	15 (20.5)
看護の実践	16 (21.1)	④ 16 (20.3)	③ 12 (16.2)	③ 19 (26.0)
カンファレンスについて	—	—	—	2 (2.7)
実習への積極性	4 (5.3)	3 (3.8)	3 (4.1)	3 (4.1)
疾患の理解	—	4 (5.1)	4 (6.8)	5 (6.8)
知識不足	—	—	—	3 (4.1)
グループでの人間関係・実習	—	2 (2.5)	1 (1.4)	2 (2.7)
健康管理	16 (21.1)	11 (13.9)	⑤ 7 (9.5)	5 (6.8)
学生自身のこと	—	7 (8.9)	6 (8.1)	2 (2.7)
漠然とした不安	—	2 (2.5)	2 (2.7)	3 (4.1)
学生1人あたりの不安項目数	2.8項目 (Min; 1~Max; 7)	2.5項目 (Min; 1~Max; 4)	2.1項目 (Min; 1~Max; 5)	2.6項目 (Min; 1~Max; 8)
合 計	214	198	149	191

*nは「不安有り」と回答した学生数, ①~⑤は項目数の上位5項目を示す

(23.3%), ⑤「看護過程の展開」16名(21.9%)で、4年間とも上位2項目は、「患児との関係」「家族との関係」で50～80%の学生が不安項目にあげていた。

3) 学生1人あたりの平均項目数(表3)

学生1人あたりの平均項目数は、13年度2.8項目(Min.1, Max.7), 14年度2.5項目(Min.1, Max.4), 15年度2.1項目(Min.1, Max.5), 16年度2.6項目(Min.1, Max.8)であった。

4) 不安に感じる内容への対応

学生1人あたりの不安項目数は、最小1項目から最大7項目までと個人差が大きく、学生個々の抱えている内容は多岐にわたっていることを踏まえて、実習期間の早い段階で、教員が意識的にその内容に対応するように心がけた。具体的には「患児とのコミュニケーションがとれるか心配」という学生には、始めの関わりに教員が付き添い、「計画発表が苦手」という学生には、計画発表や報告をする前に、事前に練習を行うなどの対応を行った。また、実習終了後の施設との反省会においても、学生の不安内容を報告するなどの取り組みを行った。

3. 実習時期による学生1人あたりの平均項目数とその順位

実習時期による学生1人あたりの平均項目数の変化をみると、実習開始時(10月)の第1グループは、各年度とも3項目以上と平均項目数が多く、第2グループ、第3グループと実習時期が進むにつれて、いったん数は減少していった。

その後、実習の中間時期(11月～12月)の第4グループ、第5グループに再び平均項目数が多くなり、実習の終了時(1月～2月)の第8グループでは減少していった(図1)。

実習期間内で平均項目数の多い順位をみると、実習開始時(10月)の第1グループは、13年度3.7項目、14年度3.7項目、15年度3.0項目、16年度3.9項目で、実習開始時という時期が13年度は2番目に、14年度から16年度は1番高い結果であった(表4)。

具体的な記述内容をみると、「子どもと関わった事がない」「子どものイメージがわからない」など、子どもと接する機会が少ないことに関連したことや、「始まらないとわからない」「前の学生の情報から」「漠然とした」など、これからスタートする実習への漠然とした不安であった。

実習中間期では、「前の実習で看護過程が不十分だった」「実際のケアが出来なかった」など、すでに終了した領域での課題や、「実習が4つ目になるので、自分の体調が最後まで管理出来るか」など身体的・精神的に疲労が蓄積してきていることに関連している記載であった。

表4 実習時期による学生1人あたりの平均項目数

	13年度	14年度	15年度	16年度
第1G	3.7	3.7	3.0	3.9
第2G	2.4	2.8	2.0	2.9
第3G	2.3	1.6	1.6	1.5
第4G	2.7	2.5	1.5	2.4
第5G	3.8	2.6	1.6	2.1
第6G	2.9	1.8	2.3	2.0
第7G	3.0	2.7	2.3	2.9
第8G	1.8	1.4	1.9	2.4

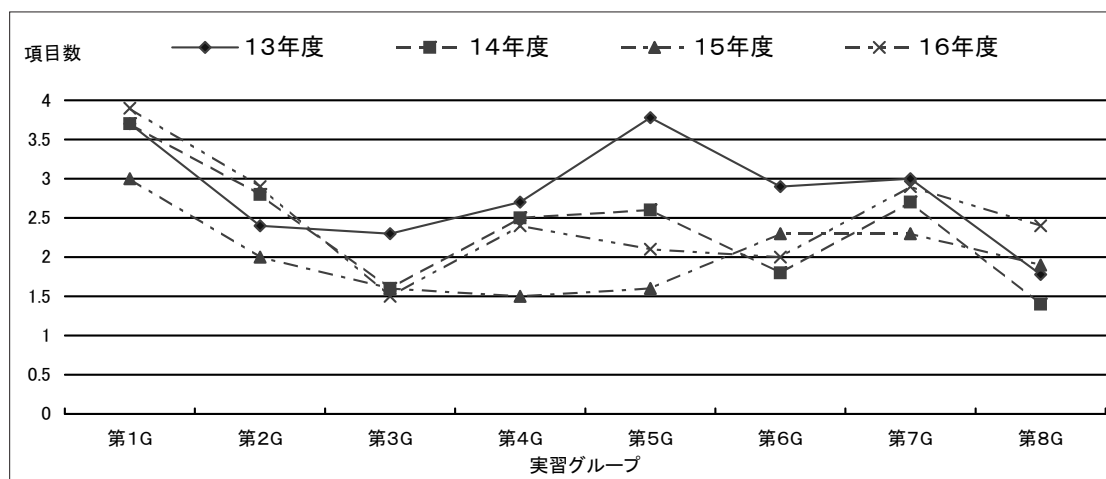


図1 実習時期による学生1人あたりの平均項目数

4. 不安の解決度

13年度から16年度で、ほとんどの学生が「ほぼ解決した」または「解決した」と回答し、「解決しなかった」と回答した不安項目は全体の1割未満であった。

「解決しなかった」と回答した不安項目と延べ人数は、13年度「スタッフとの関係」「日々の実習記録」「健康管理」の3項目で、延べ人数9名、14年度「スタッフとの関係」「日々の実習記録」「実習への積極性」「健康管理」の4項目で、延べ人数11名、15年度「スタッフとの関係」「看護過程の展開」「看護の実践」「実習への積極性」「健康管理」の5項目で、延べ人数5名、16年度「患児との関係」「家族との関係」「スタッフとの関係」「教員との関係」「看護過程の展開」「看護の実践」「グループでの人間関係・実習」「健康管理」「学生自身のこと」「漠然とした不安」の10項目で、延べ人数13名の学生であった(表5)。

具体的な記述内容をみると、「実習をもっと深く学べたのではないか」「もっと努力する方法があったのではないか」といった高い目標を持っている学生の記述がほとんどであった。

年度別でみると、16年度が「解決しなかった」と回答した延べ人数が最も多く、不安項目の上位2位を占めた「患児との関係」と「家族との関係」で、3名の学生が「解決しなかった」と回答した。

IV. 考 察

1. 実習開始前に学生が不安に感じる内容の特徴

本調査の結果、実習開始前に学生が不安に感じる内容の上位2項目は4年間とも「患児との関係」および「家族との関係」で、その関係に対する不安が高率を占めていた。

小児臨地実習における看護学生の不安要素を調査した尾首の結果⁵⁾でも、学生は「コミュニケーションがとれるだろうか」などの「小児」に対する不安項目が最も多く73%を占め、次いで「母親とうまく接することができ信頼関係が成立するか」「母親が学生を受け入れてくれるか」など「母親」への対応に54%の学生が不安を持っている結果であった。

学生は、受持ちの「患児」にくわえて小児に特徴的な付き添いの「母親」や「家族」をケアの対象者と捉えており、対象として重要視している裏付けと考えられる。これらの結果からも、実習中にこの両者との関係づくりが良好に得られるような教員の役割が大きいとともに、実習開始前の受持ち患児の選定など、実習準備の段階から教育効果を考慮した調整が重要であると思われる。

学生1人あたりの不安項目数は、最小1項目から最大7項目までと個人差が大きく、学生個々の抱えている内容は多岐にわたっている結果であった。教員は、学生個々の不安内容を実習前に把握して対応を行って

表5 実習後に不安が解決しなかった回答数

	延べ人数			
	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
患児との関係	0	0	0	1
家族との関係	0	0	0	2
スタッフとの関係	4	1	1	1
教員との関係	0	0	—	1
看護過程の展開	0	0	1	1
日々の実習記録	4	6	0	0
看護の実践	0	0	1	3
カンファレンスについて	—	—	—	0
実習への積極性	0	1	1	0
疾患の理解	—	0	0	0
知識不足	—	—	—	0
グループでの人間関係・実習	—	0	0	1
健康管理	1	3	1	1
学生自身のこと	—	0	0	1
漠然とした不安	—	0	0	1
合 計	9	11	5	13

いるが、必ずしも全員の学生に十分な関わりが持てていない現状がある。今後も、学生個々の内容に対する対応の努力と、実習期間中においてもその対応が十分であるかの確認を振り返りながら、教員の関わりや実習環境の調整の評価をしていくことが大切である。

2. 実習時期による不安項目数の変化

学生1人あたりの平均不安項目数を実習時期別でみると、実習年度によって数値の差はあるものの、各年度とも実習開始時が不安の平均項目数が多く、実習が進むとともにいったん数は減少するが、実習の中間時期に再び平均項目数が多くなり、実習終了時は減少傾向がみられていた。

このように対象学生が違っていても、4年間で同じ傾向がみられ、実習開始時に平均項目数が多いという結果から、実習初期という時期に着目して関わるのが大切で、その時期の関わりは後の実習にも影響することを配慮していく必要がある。

実習中間期で再び平均項目数が多くなるのは、すでに終了した領域で、より個別的な指導とその不安の解決をはかる必要がある時期と思われる。それに加えて領域実習が進むことで、対人関係や学習課題などから身体的・精神的にも疲労が蓄積してきていることも考えられる。

3. 実習終了後の不安の解決度

各年度で、ほとんどの学生が「解決した」または「ほぼ解決した」と回答した。しかし、16年度は「解決しなかった」と回答した延べ人数が最も多い結果であった。

池田⁶⁾の小児看護学臨地実習における学生の不安結果で「母親との人間関係」の中の「母親に信頼されるか」の項目では、実習前84.6%の不安が実習後は13.8%に、「兄との人間関係」の中の「兄と仲良くできるか」41.0%、「兄に拒否されてしまわないか」46.1%の不安が、実習後は前者2.8%、後者5.5%に減少した報告がある。

今回の結果でも、不安項目として上位2位を占めた「患児との関係」と「家族との関係」は、13年度から15年度には「解決しなかった」と回答した学生はいなかった。実習開始後の学生の会話や面接で、ほとんどの学生は、数日で「患児との関係」の不安は軽減している。これは、受持ち患児の年代も幼児期・学童期が多く、学生が「遊び」などをとおして関わりやすい年代の患児であること、その年代や個性に合った遊びや話題をそれぞれが考えて関わる努力をした結果であると思われる。

「家族との関係」は、実習病棟の配慮と協力もあり、事前の受持ち患児の同意を得るにあたって、母親や家族の承諾をいただいていることから、家族が実習そのものや学生に対して協力的であることが背景にあるが、加えて上記と同様の関係づくりへの努力の結果であると思われる。しかし、その一方で16年度に延べ3名の学生が「患児との関係」「家族との関係」で解決しなかったと回答していることは、今後の課題として重く受け止めていく必要がある。

「看護過程の展開」「日々の実習記録」も同様に、実習後は「解決した」「ほぼ解決した」と回答したものの、少数の学生は課題を残す結果であった。池田⁶⁾は、「実際はいろいろな課題を課し、押しつけの学習をさせていないか」と述べている。今回の結果から、今後も学生にとって日々の実習記録や情報収集から看護過程の展開に至るプロセスで、このような課題があることを意識しながら指導側の関わりや助言などの指導方法を検討していく必要があると考える。

「解決しなかった」と回答した不安項目は少数回答ではあるが、4年間でほぼ同じ項目があること、特に平成16年度は「患児との関係」1名、「家族との関係」2名が「解決しなかった」と回答し、その延べ人数も最も多い結果であったことから、教員としての関わり方の反省や課題の大きさを受け止め、努力していくことが必要である。

また、「解決しなかった」と回答した学生は、その記載内容から自分自身の学びに対して高い目標を持っており、今後はそれぞれの学生の課題や特性を見極めて関わることの大切さが示唆された。

V. 結 論

1. 小児看護学実習において、学生の実習開始前の不安について平成13年度から16年度で調査した結果、どの年度も95%以上の学生が「不安がある」と回答し、ほとんどの学生は何らかの不安を抱いていた。
2. 学生の実習開始前の不安内容の結果は、4年間とも上位2項目は、「患児との関係」「家族との関係」で、両項目とも50~80%の学生が不安項目にあげていた。
3. 実習時期による学生1人あたりの不安の平均項目数は、実習年度によって数値の差はあるものの、各年度とも実習開始時が平均項目数が多く、実習時期が進むとともに、いったん数は減少するが、実習の中間時期に再び平均項目数が多くなり、実習終了時は減少傾向がみられた。
4. 不安の解決度は、13年度から16年度で、ほとん

どの学生が「ほぼ解決した」または「解決した」と回答し、「解決しなかった」と回答した不安項目は全体の1割未満であった。

5. 「解決しなかった」と回答した延べ人数は16年度が最も多い結果であった。

文 献

- 1) 安酸史子：学生とともにつくる臨地実習教育 経験型実習教育の考え方と実際，看護教育，41（10），814－823，2000.
- 2) 坪井桂子，安酸史子：看護教師の実習教育に対する教師

効力とその関連要因，日本看護学教育学会誌，11（1），1－9，2001.

- 3) 田畑さよ子他：臨床看護実習における脅威とその分析，鹿児島大学医療技術短期大学部紀要，（1）：44，1991.
- 4) 亀田和恵他：看護科学生の臨床実習におけるおそれとストレス反応，川崎医療技術短期大学部紀要，（14）：44，1994.
- 5) 尾首睦美：小児臨地実習における看護学生の不安要素に関する一考察，九州大学医療技術短期大学部紀要，26：51－57，1999.
- 6) 池田京子：小児看護学臨地実習における学生の不安－実習前・後のアンケート調査より－. 新潟大学医療技術短期大学部紀要，5（2）：147－155，1994.

キーワード：小児看護学実習，看護学生，不安